

## 人間ソーロウ管見(5)

——White Indian III——

尾 形 敏 彦

### (IV)

第2章「チェサンクック湖」は1853年9月13日午後5時にボストンから汽船で基地バンゴへ向かったメイン探検第2話である。この章では主にソーロウとガイドの関係が扱われている。バンゴに着くと、従兄サッチャーが酋長の息子ジョー・エイティオンとガイドの契約をしていた。この男は昨年と同じ方面へ2人の白人のガイドをしていた。ソーロウはインディアン生活法を学ぶために注意深くジョーを観察して満足した。ジョーは禁酒で時間を厳守し、ソーロウの考え方に喜んで従った。背が低くて頑丈な24歳のインディアンであった。大きな赤い顔をして東洋的な細く吊り上がった目をしていた。フランネルの赤シャツにウールのズボンをはき、黒ハットをかぶっていた。これは木樵の一般的服装で、ペノブスコット・インディアンも用いていた。偶然、彼が靴下を脱いだ時に足が小さいのをソーロウは見落とさなかった。ジョーは木材切り出し人夫を自認していた。つまり、白人とインディアンの文化合流点にいる人間ということである。彼は英語も少し話せた。カヌーを漕ぎながら口笛で「おおサズナ」を吹いたのにソーロウは驚いた。しかし、祖先のように森の獲物だけでは暮らせないと言って堅パンと豚肉なしでは森へ入ろうとはしなかった。その時には、ソーロウはインディアンの伝統を守らない呑気者だと善意の誤解をしていた。後になって、自分の種族の歴史を少し知っていて祖先の話をすることを楽しんでいることが分った。旅の終り頃、ソーロウはオールドタウンの岸辺で見た割れた矢尻や石のたがねなどがインディアンにとって珍しいものだということを知って彼等が野性を失っているのに落胆した。狩猟に反対のソ

ーロウは獲物の解体作業を見ることに堪えられなかった。彼は森林でのこの体験以来、気分がすさんできたように感じた。やはり花をつむように静かに美しく『ウォルデン』の「より高い法則」に書いたような生活をしたいと思った。彼は必要な狩猟ならば認めたが、遊びの狩猟体験はソーロウに人間を荒野へ駆り立てる動機がいかにも卑しく下劣であるかを教えた。彼は、できるだけ多くの鹿などを殺す目的の狩猟者だけではなく、捕鯨業者や象牙業者、テレピン油製造業者も批判した。しかし、彼が言う静かな生活という規準は狩猟生活をする人には夢見る人間の馬鹿げた規準にすぎない。ソーロウ達は3人のインディアンのテントに泊って生皮の保存法や、へら鹿の耳2枚の内側をつけて刻み煙草入れを作ることなどを知った。ソーロウは「このインディアン達は2か月で22頭ものへら鹿を殺していたので親切であった。彼等は地面で生皮を乾かし、斜めの棚に肉を置いて薫製にした。2人のインディアンは真夜中に狩に出た。ソーロウ達は仰向けに寝てしゃべった。彼は木の柵の上で人間の肉をあぶっている絵を古い本のなかで見たことがあると話した。すると、ジョー達インディアンは、昔、モホーク族が人間を食べていたことや、どの部分が好きかなどについての伝説を語ってくれた。また、ムースヘッド湖近くでモホーク族との戦闘があり、多くのモホーク族が戦死した話もしてくれた。しかし、2人は、自分達の種族の歴史については何も知らないのだから彼等の祖先の話をしてやると非常に喜んだ……テント内が焼かれるように暑かったので、イエズス会宣教師達の火刑を想像した。……彼等と話はしたいし、冷たい草の上に寝たいとも思ったとき、ソーロウのつぶやきが聞こえたのか、自分達もがまんできなくなったのか、ジョーが立ち上って、たき火を蹴散らした。これを見て、遠慮せずに自分を守ることがインディアン流の作法だということがわかった」と書いている。こうして話を続けると、彼等は白人には理解できない古い言葉を持っていることが分った。ソーロウには一言も理解できない彼等の言葉は赤リスの叫びのような原始アメリカの声であった。

ソーロウの第2回メイン旅行の収穫はインディアンとの対話と並んで寝たことであった。これは第1回旅行の収穫に比較すると遙かにすぐれた収穫であった。翌朝、ソーロウ達3人はペノブスコット川の住人達に会うために前進計画

を変更して海岸へ南下した。途中、何人かのインディアンから多くの地名の意味を教わった。彼等がマスケティックと発音したマスケタキッドの意味は「淀み」であった。その夜2人の白人と4人のインディアンとが並んで寝た。オールドタウンまで帰り着くと、川岸のやせた老人がフランス人のように大きな身振りではしゃいだ。インディアンは白人の見せ物に落ちぶれていた。ソーロウは「ああ、狩猟人種よ！ 白人は彼等の獲物を追い払ってその代りに1セントを与えている」と書いた。ここで酋長を訪ねるとひどく小さな家に住んでいた。部屋の片隅に時計がぶらさがり、彼は白木綿のシャツに黒いフロックコートと疲れた黒ズボンをつけ、靴下をはき、首に赤い絹ハンカチを巻き、麦わら帽子をかぶっていた。白髪まじりの89歳であった。昨秋のように今春もへら鹿狩りをする予定だと語った。多くの妻達が動いていた。太ってなめらかな丸顔で機嫌のいい女達であった。ソーロウはこの酋長が好きであった。ソーロウは原生林と植林との相違について考えた。原始の大地は湿地である。メインの森には湿気があり、若松の背は高く細く樹皮は荒かった。靈感と再生力を与える森林が必要だとソーロウは痛感した。彼は第1回メイン旅行では文明の悪影響を受けたインディアンは下劣な嘘つきだという印象をうけたが、第2回旅行では彼等は憐びんの対象であった。

## (V)

1857年7月後半から8月前半にかけてのソーロウの第3回メイン旅行は最も長く楽しいものであった。この記録は『メインの森』の約半分ほども占めている。ガイドのジョー・ポリスは複雑な人間で、ソーロウが書いたインディアンの中では最も詳細に書かれている。彼はソーロウが理想とするインディアンとは違う文明志向のインディアンであった。しかし、ソーロウには小説家の技巧や表現力がない。『一週間』における兄ジョンがいい例だが、仲間との関係が話に統一性を与えるということがない。ソーロウの関心は場所と物で、人物はつけ足しにすぎない。非社交的なソーロウは、細部にわたって事実に基づいた話を書こうとする。ソーロウとポリスはカリフォルニア開拓から帰ってきたエ

ド・ホアーを第3のメンバーに加えた。ソーロウのガイド人選は慎重で、ポリスについては、サッチャーが少年時代から知っていたから安心していった。ポリスの社交的教養とよそよそしい態度は、ムースヘッド湖へ向かう乗合馬車で明らかになった。彼の荷物は斧と鉄砲と毛布とパイプと煙草であった。彼は乗合人の無礼な質問にはほとんど返事をしなかった。一人の男が、パイプを貸してくれと頼むと、まっすぐに見据えて、「パイプをもっていない」と平気で嘘をついた。ソーロウはインディアンとはそういうものだと思っていたし、彼自身もよくインディアンの真似をしたから何とも思わなかった。ソーロウは、「三人は馬車を降りると、カヌーを進水させた。湖と森を自由に動き回れるようになるとポリスは無口でなくなり、ソーロウが聞くもののインディアン語を快く教えてくれた。ポリスはLとRの発音が不明瞭だが英語をよく話した。ポリスは、土地購入のことで法律問題にまきこまれていて、ソーロウとホアーの助言を求めたりした。また、草とじゃが芋栽培の50エーカーの土地で働く労働者にインディアンよりも白人を雇いたがった。白人は真面目で、働き方を知っているとポリスは云った。夜になると彼はペノブスコット川でカトリック宣教師から教わったいくつかの賛美歌を歌って、ソーロウの日曜日の仕事を聞いた。ソーロウが午前は読書、午後は散歩だと答えると、ポリスは、それはよくない、私は教会へ行くと云った」と書いている。白人文明を憧れるポリスは新教徒であった。安息日に関する意見の相違は些細なことのように思われたが、次第に重要なものになってきた。(日記 1857.7.25. 参照) ソーロウが旅行中の仕事や宿营地設営などの概略を説明するとポリスは違う意見をもち出した。第一の意見の相違は、朝、狩猟話の最中に起った。ソーロウは、「ポリスは……狩猟のことを熟知していて……それで生計を立てていた。これがポリスと、森の獲物では生き残れないジョー・エイティオンとの相違であった。森の中での進路の決め方を尋ねると、ポリスは長い説明のあとで別の話をした。何年も前、彼が一人の白人とほぼ丸一日へら鹿を追った話である。ポリスが、相手に宿营地への帰り道を聞くと、彼はある道を示した。ポリスは別の道を通して先に帰ったという話である。そのやり方を聞くと、『教えられないよ。俺と白人はまるで違うからな』と答えた」と書いている。ソーロウはポリスの賢明さを尊敬し

たが、ポリスが一日の終りにすることが不愉快であった。ソーロウとホアーが夕食後、釣に出ている間にポリスは発砲するのであった。それが雨に濡れた鉄砲を掃除して乾かすためなのだと後で分かった。ソーロウは、「森の静かな道での突然の破壊音は気分を悪くする。自然に対する侮辱だ。少なくとも無作法だ。大広間や寺院で発砲するようなものだ」と注意した。第二の衝突は、森での作法をめぐる起った。つまり、ポリスは再び安息日論争を持ち出して、「我々はここでいろいろなものを見ているが、日曜日にはそんなものはしまっておいて、月曜日になったらまた見ればいい」と言った。彼はカタードンへの途中、牧師と一緒にだったという知人のインディアンのことを話し、彼等が安息日には祈りを捧げるとか死者を説教して葬るとかいう敬虔な様子を話した。これはソーロウにとっては重大な宗教問題であった。20年間ソーロウは宣教師に反対してインディアンの味方になり、インディアンはキリスト教徒に反対すると思っていた。しかし、今、ソーロウはキリスト教徒のインディアンをガイドにしている。ポリスはソーロウに対しては寛容であった。ソーロウは、彼が非常に信仰が厚いインディアンだと思った。ポリスは朝晩、忘れると慌ててひざまづくと祈りを捧げたソーロウは書き加えている。

ソーロウがメインへ行った目的は人間と文明からのがれ、非情な大自然に接して、新しい自分を発見することであった。狩猟によって富を得たポリスは食料と報酬のために森に住む文明志向のインディアンであった。ソーロウは、いくらかの賞賛をこめてポリスがどのように森の奥100マイルを舞台とし、鉄砲、斧、毛布、少しの食料を担ぎ、起きると狩猟に出かけ、途中で作ったカヌーの中に毛皮をつんで戻るかを後で説明している。ポリスは森での生活技術を失うことなしに文明を利用していた。ポリスはソーロウとホアーを見物人という程度に考えていた。ポリスはソーロウ達の文明逃避を理解できなかった。ポリスはボストンやニューヨークやフィラデルフィアに住みたがった。ソーロウとポリスは精神的に反対方向へ進んでいた。ソーロウとホアーは自然を信頼するあまり、失敗をくり返し、いつもポリスに救ってもらった。ポリスは数少ない森への移住白人に興味を持ち、習慣的に小屋から小屋へと訪問していた。経験から彼は孤立することを避け、それが賢明なことを二人に示した。彼らは川の曲

がり角とか静かな場所とかで待ち合わせをした。ある場所で会った後、ボリスはソーロウに手を振って滝を乗り越えるために戻って手伝えと知らせた。ホアーはソーロウよりも50~60フィートも先を歩いていて、ソーロウが戻るのを見なかった。そのため仲間2人を見失ったホアーは2人が先を歩いていると思っていた。彼は二人に追いつくために急いだが、実は2人から遠ざかっていた。しかし、ソーロウは気づかずに、近くにいたホアーが崖を踏みはずしたのではないかとひどく心配した。ボリスは平然と、一日中働いたから疲れたとこぼした。ソーロウが、かがり火をたいて鉄砲を撃ったらどうだろうかと提案したのにも反対して、ホアーが闇の中をここまで来るくらいなら彼のいる場所に留まっている方が安全だと主張した。ボリスは、「この暗さではどうにもできない。朝になれば見つかるだろう。大丈夫だ。夜営するだろうし、ここには危険な野獣はいない。彼が前にいたカリフォルニアのように恐ろしい熊もいない。暖かい夜だから安全だ」と言った。翌朝、2人はウェブスター川の河口近くでホアーを見つけた。ホアーはパイプをくわえて、露に濡れて少し寒かったが気持ちのいい夜だったと言った。ホアーを一目見ると、ソーロウは喜びの余り何度も叫んだ。ボリスは一度で十分だと言わんばかりに、きこえてるよとそっけなく言った。7月30日(木)、ボリスがへら鹿を撃った時にはソーロウは以前ほどには解体作業に驚かなかった。ボリスが皮をはいでいる間、ソーロウは釣に行った。その夜、ボリスはみんなにチェッカーベリー茶を入れてくれ、みんなはその夜営地を「チェッカーベリー茶キャンプ」と命名した。ボリスは森にちょっと探りを入れただけで、一本の丸太の下に30~40個もの鋼鉄製の罠をみつつけて驚かせた。7月31日(金)の記述の中では、ボリスが10歳の時、危うく餓死しそうになった話が繰り返されている。その話は自然界の危険と苦難から助け合わなければ逃れることができないというボリス自身の入門話であった。ソーロウとホアーの入門は遙かに平易であったが、入門してはじめてボリスを一層尊敬するようになった。狩猟者は他人に頼らざるを得ないということを理解したソーロウの孤独主義は揺らいだ。もっとも、彼は言うほどには孤独でなく、友人が周囲にいただけでなく、いつも帰れる両親の家もあった。彼は同様な教訓を含む昔話も書き加えた。ラール神父(Jesuit Hierosme Lalemant)

が語ったある神父の死の話である。フランス人達は蚊の攻撃に悩まされるあまり走り続けた。しかし、一人がのどの渇きで立ち止まると、仲間の二人も一緒に立ち止まって蚊を撃退しなくてはならないという話であった。3日もたたないうちに、ポリスは白人達との関係を変えてきた。彼はソーロウに編んだ樺の樹の皮からろうそくを作ってくれたり、木に目印を残してくれたり、ホアーに樺の樹の皮でパイプを作ってくれたりした。また、巧みな木彫りをして驚かし、前よりも心をくだくようになった。彼は遊んだりからかったりもした。8月1日（土）に、彼は急流ぞいの陸路でソーロウに競争をいどんだ。彼はカヌーを選び、ソーロウは鉄砲、斧、かい、やかん、フライパン、皿、ひしゃく、カーペット、ポリスの牛革長靴を手を取った。この時には緊張感がほぐれた。抜きつ抜かれつの競争がおわると二人とも息を切らして喘いだ。ポリスは「ああ、時には遊ぶのが好きだ」と言った。8月2日（日）にポリスは激しい腹痛に一日中悩まされ、一行はあまり前進できなかった。しかし、この病気は日曜日ということに関係があった。この日、ポリスは教会へ行かないことや安息日にしないことに悩んでいた。夜になると彼は火薬を混ぜた水というのを一杯飲んだ。とにかく、日曜日だけの腹痛であった。8月3日（月）にオールタウンへ帰りながら、ソーロウはペノブスコット川は白人社会以上に社交的だという事に気がついた。インディアンは開拓者の孤独主義では生きてがらず村のなかで共同生活をしていた。

ソーロウは空想的にポリスを野蛮人として書くこともなく、ポリスの文明尊敬を軽視することもなかった。ソーロウはローウェルに頼まれた時、1858年の「アトランティック」誌にこれらのことを発表しようとはしなかった。もし、ポリスがそれを読んだら、二度と彼と顔を合わせられないだろうと心配したからであった。彼は人間を研究の主題に利用したことに当惑したのであった。感じやすいソーロウはポリスから学んだことの御礼に相当するだけの敬意を表していた。エマソンはポリスとジョン・ブラウンとウォルト・ホイットマンを晩年近くのソーロウに最も大きな影響を与えた三人だと言った。エマソンが数に入れたことからポリスの大きな影響を想像できる。しかし、ソーロウが描いたポリスの肖像画には不十分なところがある。「アレガッシュ川と東流」の章

で最初と最後を除いたほぼ全体でソーロウはポリスをインディアンと呼んでいる。しかし、旅行中、ソーロウとホアーは彼をポリスと呼んでいた。それにもかかわらず、ここではインディアンと書いている。ソーロウ達が彼をポリスと呼んだのに対して、ポリスはその綴り方とか、その意味を知りたがったが、ポリスは一度も二人を名前では呼ばなかった。ポリスは2人の年齢を正確に言い当てていて、自分は48歳だと言った。ポリスは、三人を you and I と呼び、ホアーとソーロウをそれぞれ you と呼んで、決して名前では呼ばなかった。当時のしきたりでは、彼は二人をソーロウさん (Mr. Thoreau) ホアーさん (Mr. Hoar) と呼び、彼はジョー (Joe) と呼ばれなければならなかった。二人が彼をポリスと呼んだことは、第一にポリスはソーロウよりも8歳、ホアーよりも20歳ぐらい年上だったから幾分か敬意を払ったのであろう。二人は彼を呼ぶのに丁寧な言い方をしたのだが、彼は二人を呼ぶのに親しみのある呼び方をしたのであった。しかし、you and I と呼ぶことにポリスが決めたことは、“you (白人二人)”と“I (インディアン)”ということである。二人の名を使わないのは彼は二人を個人であるよりも、彼らの民族とみなしたわけである。これがポリスの、ひいてはインディアンの見方だとすれば、白人といるときにポリスは自分がインディアンであるとよく認識していたことになる。呼び方が不都合だというのは、ここに19世紀の人種差別が見られるということである。ソーロウ自身、ポリスに賛成するときには利口な部下をほめるように、誤ちを犯した時には駄目な奴を叱るように言ったから、ソーロウの呼び方からポリスが48歳で雇い主よりも年上であるということは実感できない。彼は分別ある男として待遇されてはいるが、やはり年下の男のように扱われている。この点にソーロウ自身は意識しなくても、彼の差別的態度は明らかである。ソーロウはポリスを、ひいてはインディアンを島や大陸の一部分と見なした。ポリスは記憶に残っている思い出のような遠景から見るとインディアンであるが、顔を合わせるとポリスである。インディアンを連れての自然旅行は未開精神の探検だが、その場合、インディアンが案内人であって、白人は新参者なのである。

ソーロウが3回目のメイン旅行を成功だと感じたことは、ブレーク (Harrison Blake) 宛の手紙 (1857. 8. 18) に書かれている。ソーロウは「帰ってから私



は自分の人間的な幅が広がったおかげで世界がいくつかの面で少し広がったように思う。いつも感じているほど小さく浅いものではないと思えるようになったとうぬぼれている。……森の中でも驚くほど巧妙に道をみつけるインディアンは白人にない多くの知識をもっている。……世界をどう見るかは景色が各種の衣装を身につけるように年々変るが、真実は相変らず真実であると思う。……カターディンは今もそこにあるが、それ以上の確かさで私の昔からの信念もそこにある」と書いた。ソーロウは他人が見すごしているもののなかに価値を見出した。彼は、自分の野性に対する知識の乏しさに驚いた。とくに印象的なのはカターディンや他の山のイメージであった。11年前にはカターディンは「巨人のように非人間的で冷酷な自然界」の代表であった。今、それは雄大であり、母性的であり、堂々たる信念の象徴であった。インディアンの知識は我々が考えをやめるところからはじまるということについてソーロウは1857～58の冬の間じゅう考え続けた。ポリスとエイティオンが彼に示してみせたように、その知識は言語のなかに存在した。方言の多いことにはソーロウは驚いた。とくにペノブスコット族の方言は現在では消えてしまっているが、彼はそれに関心をもった。1858年2月にハーヴァード大学図書館で彼が見つけたラル神父の「アベナキ部族語辞典」には多くの実例が載っている。以前にソーロウが写した「インディアン・ブックス」のなかの語彙のリストは単純にインディアンの単語を同意義の英単語と置き換えたものであった。これは意味のない事実の羅列である。彼はラル神父によってニューアンスを含む多くの語彙を得て、それが神の声になった。（日記 1858. 4. 4. 参照）ソーロウは言語学に対する興味を強めた。ラル神父の辞典は完成こそされなかったが、アベナキ族の本来の歴史を圧縮したもので信頼できた。ラル神父はケネベック川に沿ったインディアン部落にイエズス会伝道師として参加した。彼は1691年には「野蛮人の中で一年たった。私は知る限りの単語を辞書の形式で並べる仕事にとりかかった」とフランス語で書いている。1724年にマサチューセッツからの侵入者が部落を破壊し、ラル神父を殺し、その原稿を戦利品として持ち帰った。しかし、偶然、ハーヴァード大学に預けられ、1833年に言語学者ピカリン (Pickering) がアメリカ科学芸術協会誌の新シリーズ第一巻の370～574ページ

ジに発表した。ソーロウは1858年2月15日にこの会誌の第一巻を借りて、「インディアン・ブック」の174～186ページに注釈をつけた。樹木や果物だけでなく、魔術や賭博などの単語もあげた。しかし、単語そのものを写すのではなく「へら鹿の心臓の中心にある骨をさす」語や「へら鹿の左後脚をさす」語があるということで、インディアンが物を細かく観察していることの手がかりにした。5月5日、コンコードでのチップウェイ・インディアンによる話を聞きに行った後、偶然、連れていたペノブスコット・インディアンがジョー・ポリスの弟だったのでソーロウは新しいインディアン語を追加することができた。科学が教えている枯木ばかりを学んできたソーロウは生木の何を何も知らなかった。科学名しか知らなかったのに対して、ガイドがインディアン名を教えてくれた時、新しい光が射してきたようにソーロウには思われた。言葉を理解するにつれてソーロウはインディアンを新しい観点から見ることができるようになった。カヌーという語に伴う各部分の名称とか、動かし方に関する単語を彼等はもっていた。ウィグワムという語は何となく地面に近づいた感じがすると思った。ラール神父の辞書によって既知のすべてのものに新しい名前をつけかえようと思った。ソーロウは興奮を押えられずに話した。ハーヴァード大学の司書ジョン・ランドンの日記(1858.5)にソーロウとの会話が記録されている。

「今日、ソーロウは私に科学的人間がインディアンとその言語と習慣に気を配らないのは間違いだと詳しく説明した。地質学、植物学、動物学に関して、インディアンは科学的人間とその研究対象との中間に位置している」と書かれている。ポリスがいかにも蚊の「かすかな羽音」を聞きとることができ、マスカラットなどが立てる音や鳴き声を真似ることができたかを話した。これに類したことを『ウォルデン』にもソーロウは書いている。1859年の日記には矢尻によってかき立てられた想像について5頁もソーロウは書いている。古今を問わず矢尻はいかなる芸術品よりも耐久力に勝っている。「いつか矢尻の雨が降る時があるかも知れない。矢尻はアメリカの地表全体にあるからだ。……つまり、この大陸の精神の象徴なのだ」とソーロウは書いた。(日記 1859.3.28. 参照)さらに、「多くの矢尻を見つけた。草原や丘と同様に土が乾いて軽い場所では最初に雪がなくなり霜が消える場所に存在したということは注目すべきこ

とである。……何度か1.2平方ロッドのウィグワムが建てられそうな露出した部分以外では矢尻が見つからなかったこともある。高度の違いがあるにしても1フィートもないであろう。インディアンがこの季節に都合のいいようにとの配慮から平原全体の最も乾燥した地点を的確に選んだかのようである」と書いている。ソーロウは森の研究と野生の種子の散布などの広範な研究にも興味をもった。彼はインディアンが開墾した土地の状態と矢尻の発見とを関係づけた。彼の考えによると彼等が開墾したのは「土の軽い平らな区域だけで、彼等の粗末な鍬でも掘り返すことができる土地」だけであった。最初、世界は亀の甲羅だとするインディアンの信念を馬鹿げた迷信だとしながらもソーロウは亀を近くで観察して、この話の真実を発見しようと努力した。（日記 1860. 11. 26. 参照）

## （VI）

『一週間』と『メインの森』で白人とインディアンの宗教と戦争、商売と友好などがニューイングランドの性格を形成したとソーロウは書きたかった。インディアンはソーロウにとっては詩であり神話であった。インディアンのワナランセットやワワタムも、白人のティンクやフェアウェルやアレキサンダー・ヘンリーなどもソーロウにとっては、ブラッドフォードやウィンスロップやマザー一家のようなニューイングランドの偉人以上の英雄であった。ソーロウは美は独創的でなければならぬと考えていたから、彼が考える原罪とは模倣のことであった。この点、頭の皮をはぐことは模倣であったが、ソーロウはハンナ・ダスタンを非難しなかった。それは、インディアンを教師だと尊敬していたから模倣ではなかった。ところで、ハンナ・ダスタンの記事は作り話にすぎない。白人はインディアンのなかに神のように出現して、神のように受け入れられたというのがこの話の本音であろう。ソーロウは白人の影響をうけていない原住民という意味で文明に触れる前のアルゴンキン族の情報に特別の関心を抱いていた。そのため、アルゴンキン語を研究して、ヨーロッパやアジアの言語との間に類似性があるかどうかを知ろうとして、言語学、文献学、人類学に

ソーロウは興味をもったと思われる。(日記 1852. 2. 3, 3. 16. 参照)

未完成のソーロウの『インディアン・ブックス』における引用文とそれの批判には興味深いものが多い。例えば、カーヴァー (Captain Jonathan Carver) の五大湖について書かれた部分、インディアンの説明部分などはインチキだとソーロウは批判した。それらはカーヴァーの妄想で、貴重な観察などは何もないと言って、(日記 1852. 6. 24. 参照) その多くを写さなかった。19世紀初期のインディアン賛成派と反対派の文学論争ではソーロウは忠実に双方の著書を読んでコメントした。ソーロウは土着のアメリカ人の起源についてはアデール (James Adair) の理論によって考察をはじめた。アデールは18世紀のインディアン商人で、インディアンをユダヤ系種族だと言った。それは、ヘブライ語とアデールと一緒に住んでいたチェロキー族やその他の南部種族の言葉に類似点があるということからの類推であった。また、生まれつき赤い皮膚をしてはいないということも理由の一つにしていた。確かに、インディアンの中に赤い皮膚でない人もいる。褐色の髪に灰色の目 (ノートブック No. 2. ダニエル・グーキン) とか、フランス人のように白い (No. 2. カルティエ) とか、生まれつきは白いが陽に焼けた (No. 6. ジューリエン・ペロー神父) とか、白色人 (No. 9. 『太平洋鉄道報告』 Pacific Railroad Reports) だなどの説がある。結局、ソーロウはアデール説を愚説と呼んだ。また、彼は英語を話すタスカローラ族のクッシック (David Cusick) から、怪物の地下世界と人間の地上世界の起源に関連して、ある女が子供を生む時に地下世界に沈んで大亀に養われたというイロコイ族の伝説を聞いた。これを他愛もない話でインディアンはどんな歴史を書いているのかが分かるのが唯一の価値だと言った。このようにソーロウは、アデールやクッシックの馬鹿げた論からバートン (Benjamin Smith Barton) の説へと進んだ。その『アメリカ・インディアン諸部族の起源に関する新見解』*New Views of the Origin of the Tribes and Nations of America* から「ノートブック」第9巻に22頁も写している。バートンは、インディアンはペルシア人と他のアジア民族からの血統をひく民族だと言った。バートンは、インディアンが太平洋を渡って移住したという説を提案した最初の人であった。しかし、ソーロウはそんなことは分からないと言って信用

しなかった。また、バーダー (George Burder) はインディアンを1770年にプリンスマドック号でウェールズカラ航海してきたウェールズ人だと書いたが、それは根も葉もない嘘だとソーロウは決めつけた。克蘭ツ (David Crantz) は『グリーンランド史』(*History of Greenland*) のなかでグリーンランド人とインディアンの風習の類似に感銘を受けたと書いている。また、モルガン (Lewis Henry Morgan) は1857年に何千ドルという大金と20年以上の歳月を費やしてインディアンのアジア起源説を確立しようとした。結局、10人10色の説である。ソーロウはインディアンの起源というよりも人類の起源について知りたいと思ったらしい。誰も、人類の起源は猿だとか、地球にたかるバクテリアだとか思わない時代であった。タンナー (John Tanner) の、インディアンは唯一の狩猟民族だという作り話にソーロウは反論したが、馬鹿にはしなかった。タンナーが30年間もスペリオル湖畔でオジブエイ族と共に住んでいたから彼の権威をソーロウは尊敬したのである。彼は驚くほど多くの抜き書きをした。捕虜についてもかなり多くの引用をしている。たとえば、「彼等を自分達の国へ連れ帰り、とろ火でゆっくり焼いた。あるいは棍棒で殴ったり、矢で射殺して頭を運び去った。重荷の時には毛髪のついた皮だけを運び去った」とか、「最初、彼等は爪を引き抜き、弓をひく3本の指を切り落とした」など多くの引用がある。また、「イロコイ族は木の葉で姿を隠せるようになるまでヒューロン族との戦いには来ない」などと戦闘技術についての引用もある。時には捕虜が騒ぎを起して闇の中に脱走することもあったらしい。インディアンは土地を求めて戦うのではなく復讐のために戦った。フランスのヴィモン神父 (Vimont) の話は生き生きとしている。それは、イロコイ族に捕えられた子供達と一緒に2人のアルゴンキン族の女についての話である。「イロコイ族は私達の幼児を焼き串に縛り、目の前で生きたまま焼いた。……哀れな幼児は熱さを感じるまで火を知らなかった。幼児は私達を見つめ、泣き叫びながら殺された。……幼児が死ぬと、それを釜で煮て目の前で食べてしまった。」彼等の野蛮と残酷さと同時に彼等の雄弁と外交手腕についてもソーロウは引用している。インディアンは野蛮であって高貴である。インディアンの話は真実に近く、率直で力と詩情に満ちているとソーロウは言った。1696年のオールバニー

(ニューヨーク州)における5部族再会の時のモホーク族の弁論をソーロウは書き抜いた。ソーロウは実用的であると同時に芸術的な農具のことも日記に書いている。(日記 1853. 11. 29. 参照) また、インディアンの釣糸のことも書いている。(日記 1856. 1. 19. 参照) リケットソン (Daniel Ricketson) と一緒にニューベッドフォード (New Bedford) 近くに残る唯一の純血インディアンであるシモンズ (Martha Simons) から薬草について学んだことも書いている。(日記 1856. 6. 26. 参照) ハンター (John Dunn Hunter) の『捕虜の思い出』(Memories of a captivity) からも薬草のことを写している。インディアン語で「味がいい」という意味の彼等が吸っている「アンゼリカ」とか「消えた炎」という意味の胃薬「アセス」など一連のリストを作った。その他、白人狩猟者がオーセージ土人とかカンザス土人をつれてロッキー山脈を横断して太平洋へ出た大旅行談とか、インディアンの西部横断旅行記などもソーロウは書いている。(日記 1859. 2. 3. 参照) ついでだが、この日はソーロウの父が死んだ日であった。ソーロウは父の簡単な年譜などを書いた。父はコンコード最古の住人の一人で「過去50年に渡って町の地理にも政治にも歴史にも精通している一人であった」とソーロウは書いている。

## (VII)

ソーロウは生前には単行本を2冊しか出版しなかったが、雑誌記事、評論、新聞記事、講演原稿など多くのものを書いた。彼の姉妹や友人は1861—62年頃にソーロウが整理していたものを1863—66年に5冊にまとめて死後出版した。その後、1881—92年にソーロウの友人ハリスン・ブレイクが季節ごとにまとめた日記からの抜粋を出版し、1906年にブラッドフォード・トリートとフランシス・アレンが『日記』14巻を出版した。ソーロウに対しては『ウォルデン』以後、筆力が衰えたとか、若くてやつれた空想家だとか、これ以上書けば表現法を見失うだろうなどという批判がある。エマソンはソーロウ追悼会(1862)で「誰もなし得ない中途半端な仕事を残して」死んだ男だといった。ソーロウは晩年の8年間になぜ雑誌などにだけ書いたのかと言われたりするが、彼はアメ

リカ・インディアンについて書きためていたという説もある。こういうことを言いはじめた一人フランクリン・サンボーンは『メインの森』を批評（1864）して、「この本の読者はインディアンやその本来の特徴への一貫したソーロウの賞賛に注目すべきである。インディアンの歴史や特色に関する彼の研究を読者は見落としがちである。インディアンについて書物を作るのがソーロウの目的であり、インディアンに関する記事を彼は多数集めていた」と語った。その一年後に『コッド岬』を批評したサンボーンは「貴重なインディアンの初期の歴史の研究を完成するためにソーロウは生きてきたようなものだ」と書いた。たしかに、ソーロウはインディアンの歴史と特色について書こうとしたように思える。サンボーンは1882年に、そして、イギリスの伝記作家ヘンリー・ソルト（Henry Stephens Salt）は1890年に、このことをくり返し強調した。収集の態度から『ウォルデン』以後、彼は明らかにインディアンについて書く計画をもっていたらしい。インディアンは有史以前のアメリカの象徴であり、単純な経済と英雄を歌った詩人であり、自然について詳細な知識をもつ人間であり、白人の村に対して非協調的な態度をとる代表者だとソーロウは考えていた。ソーロウにとって文明生活を拒否することは、インディアンの習慣を採用し、白いインディアンになることであった。

『ウォルデン』は「遠い土地からの手紙」であった。それに対して有史以前のアメリカの大森林と未知の荒野からの手紙がインディアンに関する本である。しかし、サンボーンは勿論、彼よりも身近なチャニング（Rev. William Ellery Channing）さえもソーロウからインディアンに関する書物についてはなにも聞かなかったと言っている。エマソンもソーロウの『日記』がぼう大なことさえも長らく知らなかった。ただ一つ推測されることはホーソーンの手紙（1849. 2. 19.）に対して「インディアンの講演をすることは多分思いあがりだろう」とソーロウが書いていることである。実際にソーロウが話したものの（1849. 2. 28.）はウォルデンについての講演であった。1853年の科学振興協会の招待をソーロウは断った。物笑いの種になるのを避けるつもりであったらしい。ソーロウ自身は神秘主義者、超絶主義者であった後に自然研究家だと思っていた。ソーロウが集めた覚え書きはインディアンに対する彼の強い関心を

物語っている。サンボーンは単なる話の積み重ねにすぎないと言ったが、それは誤解のように思える。各種の著書や記録からの引用であるソーロウの「インディアン・ボックス」はいわば彼の石切場であった。『一週間』のなかのあれこれの話も、『ウォルデン』のなかのマサソイトの歓待話やインディアン小屋の話も「インディアン・ボックス」第2と第3からの再引用である。このNo.2 にはスクワイア (Ephraim George Squier) の『ミシシッピ河峡の古代記念物』からアメリカの遺物と他の大陸の遺物との類似性について多くの引用がある。No.3. とNo.4. にはカナダ・インディアンの記事が多くのもせられている。No.5. にはインディアンの宗教や火葬などのことが書かれている。それは掘る道具がなくて埋められなかったからだろうとソーロウは想像した。また、No.5. の約半分はカナダ土人についての話であって、ソーロウの関心がカナダ土人に及んでいることを示している。No.6. ではモートン (Samuel George Morton) の『アメリカ人の頭蓋骨』(Crania Americana) という南北アメリカ・インディアンの人類学的比較考察から15頁とスクール・クラフト (Henry Rowe Schoolcraft) の「歴史的統計報告 Vol. 1.」から80頁も写している。No.7. は1632—36の間のイエズス会関係の雑誌や報告から141頁も引用している。また、ピカリンの『人間の諸民族』などインディアンの祖先研究に役立つものを引用している。No.11. では製本されていない物語からも引用している。1858.6.21. までの数年間には1693～94年の分から約200頁にも及ぶメモが写されている。ソーロウは神父達の説教や教会建設の苦心談などには関心がなく、神父の誠実さと荒野における実際知識などに限って高く評価した。カヌーの乗り降りには水や砂を入れないように服をまくるとか、大きな帽子は邪魔なのでナイト・キャップを使うなどということである。インディアンには無作法などということはなく、そこにいたくないのでなければ漕ぎはじめてはいけないのであった。イエズス会が最も多く接触したのはヒューロン族であった。ソーロウは彼等ヒューロン族の農業、狩猟、結婚、性生活、埋葬、家の作り方、薬品、ゲーム、魔術などを多くの書物から写した。イエズス会士と対抗したのはイロコイ族であった。ヴィモン神父は、イロコイ族の拷問は残酷だと報告しているが、彼等の雄弁や外交手腕や共和制社会主義などに関する資



料から、これとは違う報告もソーロウは入手していた。しかし、ソーロウがイエズス会物語を熟読したのは、それにインディアンの旅行、歴史、文化などが書かれていたからであった。ソーロウは詳細にイエズス会士やスクールクラフトの記事を調べた。しかし、No. 7. のイエズス会士の記事からの長い引用の後で、6頁もソーロウはコメントをつけた。その梗概を見ると、「呪術師のインディアンの想像力に対する魔術の作用は医者や文明人の知識に対する医術の作用と同等の価値をもっていた。……白人はインディアンの足跡を辿って道を作った。……インディアンの男は戦争や狩猟や漁業やカヌー作りや網や罟作りなどを仕事とし、女は家庭用品作りを仕事とした。……インディアンはジャコウネズミのように頑丈で、しなやかで、冷たい性格をもっている。未開人と文明人を比較すると、未開人の方が身体的にはすぐれている。また、未開人のほうが立派な運道路や遺跡をカリフォルニアからペルーに至るまで残している。ギリシア人にとって東洋人が未開人であったように、インディアンは白人にとって未開人であった」などである。ソーロウがインディアンに関する書物を作ろうと思いはじめたらしいということは、No. 8. がそれ以前のものよりも遙かに長いことから想像される。カナダなどの話を加えると831頁もある。No. 9. は430頁余で、No. 10. は660頁余である。1852. 12～1858. 2. の間はインディアンに関してソーロウは極めて熱心であった。その間にメイン州へ旅行をした。1850年代の多くの作家のように彼もインディアンに関することは人々が読みたがるテーマだということを知っていた。その彼が1858年初期にインディアンに関する本を書くことを諦めたのは、メイン旅行が一応成功したからである。ガイドのポリスから余りにも多くのことを学びすぎてポリスのことを詳細に書かなければならず、ポリスに会わせる顔がないと考えたからであった。もし、ポリス達からの情報を詳細に書かなければほとんど全部が不確実なソーロウの読書知識になってしまう可能性があったからである。彼が多数の引用した作者の中で、アデル、ロスキール、スクールクラフトの3人のアメリカ人はインディアン研究の専門家であった。No. 12. ではソーロウの新しい課題である野性の果実と種子という植物関係の書籍からの引用ばかりが続いている。「インディアン・ブックス」の最も特徴的なところはソーロウの言語学的関心

とロジャー・ウィリアムズの『アメリカの言語への鍵』(*A Key into the Language of America*)やジョン・エリオットの『インディアン文法』(*Indian Grammar*)や『太平洋鉄道報告書』などからの多くの語彙の写しである。ソーロウの「インディアン・ブックス」は批評に耐えられないとしても、実用的な有効性はある程度はもっている。

ウォルター・ハーディングによると、樹木成育の野外調査のために、とくに、1860. 11. 3. の寒い午後に実施した調査のために、ソーロウは悪性の風邪にかかった。それが彼の病気のはじまりであった。病気は1861年冬に悪化し、春には医者温暖地への転地療養をすすめ、西印度か南ヨーロッパをすすめた。ソーロウは西印度はむし暑いと言い、南欧は費用がかかると言って断った。結局、サッチャーが10年前に肺患で転地療養をしたことからであろうか、ソーロウは乾燥地ミネソタ行を決心した。当時、ミネソタ州政府は気候が治療効果をもつと宣伝していた。ソーロウはアレゲーニー山脈以西へ行ったことがなかったので、インディアンと中西部の動植物に関する研究と転地とを結びつけたのであろう。そのために医者の忠告がどうであろうと、経済問題がどうであろうと、ソーロウはサッチャーが回復したミネソタを選んだのだと思われる。現代は原始時代にはじまり、それ以前の世界は神の世界だから、原始時代は現代より神の時代に近いことになる。究極的には、神は暗黒のなかの光であり炎である。ソーロウは最終的には神の国を憧れたのであろうが、物質文明の人間の国へ近づくことを回避できない人間の運命をもっていた。ソーロウの臨終の言葉は「インディアンズ」であった。「青年は働いてはいけない。働く男は夢を見ることができないからだ。最高の知恵は夢のなかで授かる」というネ・ペルセ族インディアンの説話は神と語る人にふさわしいと思う。宗教の本質は神のお告げであり予言である。しかし、「老令という高い丘の上からふりかえる時、夢はすべて死んでいる。国を支えてくれた柱は分解して残骸だけが散らばっている。結束させる中心はもはやない。聖なる樹は死んだのだ」というスー族のブラック・エルクの言葉は現実的である。白い風が西から吹いてきて聖なる枯木を粉にして吹き飛ばした。しかし、聖なる誰かが何処かで囁いているのが聞こえる。インディアンが何処かで話しているとソーロウは思ったに

違いない。激変を続ける現代、世代が変わると漫画文学が純文学に交替するような感じがする。その時でもソーロウならば、White Indian としてアメリカ・インディアンが神の怒りを怖れて登ることをためらった高い山々の頂上まで飛ぶことができるかと想像したことであろう。

## (VIII)

ソーロウは比較的短い人生をほとんど自然とインディアン研究に費した。人生は自己満足に使えばいいのだからソーロウはまず成功したと言える。今日では各地のインディアン特別保留地 (Indian-reservation) で彼等はかすかに息をしている。面白いところは南西部で、その中心はニューメキシコ州のサンタ・フェであろう。私はプエブロ・インディアンの砂絵に感動したことがある。原色の美しさにはではない。満足だと言うと、とんと立てて絵を消した。惜しいと思った時に、人生とはこんなものだと言った彼が言った真理とも諦めともつかない声に感動した。インディアンは絵を描いたり、ダンスを見せたりして生活している。白人社会を否定するような力は全くない。弱者が敗北するのは大自然の鉄則である。見せ物として生活しているインディアンを見ないで死んだことはソーロウにとっては幸福なことであった。

西部へ追われるインディアンに安住の地はなかった。政府の平和政策とはインディアン社会の解体と伝統的生活の破壊のことであった。政府がいかに正義を裏切ってきたかは、すべての部族の歴史が物語っている。白人は彼等を文明反対者として嫌悪してきた。インディアンに味方する記録もあるが、感傷的と見なされてきた。彼等には財産権も自由や幸福の追求権もない。商業的立場から、白人が開拓者精神に飽きてきたところへインディアンが登場したのだが、間もなく飽きられるであろう。例えば、1950年にはインディアンの立場から書かれた西部劇が映画化された。ジェームズ・スチュアート主演の『折れた矢』である。金鉱山師の白人がコチーズ酋長の人間性に感動して、インディアン娘と結婚したが、白人部隊に彼女を殺されるという話である。その後、1990年度アカデミー賞7部門に受賞した西部劇『狼とのダンス』(*Dance with wolves*)

が有名である。西部辺境に憧れた北軍のダンバー中尉がスー族と親しくなり、彼等の文化にひかれ、結婚してスー族の一員になった。彼は小屋のような砦に住み大自然を肌を感じる。周囲に近づく狼と遊ぶようになり、スー族は彼を「狼と踊る男」と呼んだ。ダンバーは攻めてくる軍隊に捕われ、裏切者として断罪される。道案内のために連れられてゆく途中でインディアン襲撃に会った軍隊は敗走する。インディアンの仲間を迎えられたダンバーは軍隊の来襲に備えて移動をすすめる。酋長は「君は裏切者ではなくて、スー族の一員『狼と踊る男』だからここに留まれ」と言うが、ダンバーは彼等に対する迷惑を考えてスー族と別れる。主演のケビン・コスナーが監督もしている。カメラは美しい。正義と勇敢というインディアンのショー的作品で、インディアンは決して強者にはなれないという印象を与える。亡びゆく勇敢な種族と呼びながら差別的にひくく見ていたソーロウがインディアンを憧れたのは、ソーロウ自身が文明社会における自分の弱さを感じたからなのかも知れない。

20世紀後半は小インディアン・ブーム期である。スー族のスポッティッド・テルは、「私は何を信じていいかわからない。ある男が、おまえ達の信仰を捨てろと言ったのでメソジストになった。少したつと別の白人が来てバプティストになった。また、別の男が来てプレスビテリアンになった。今はエビスコパリアンになっている。彼等は自分だけが正しいと言うので、私はすべて嘘だときめた。偉大な神を信じて自分なりに崇拜している」といった。また、チェロキー族のジョン・リッジは、「チェロキー族はインディアン最初のアルファベット作者だ。辺境に住む貧しくて無学なジョージ・ゲスが馬鹿にされながら遂に68の音声に分類して、それらを符号に直して68のアルファベットを作り、新聞までも発行した」と言った。ソーロウが聞けば直ちに写したことであろう。どの程度まで信頼したらいいかわからないが、これらの話はハミルトン(Charles Hamilton)の『雷鳥の叫び』(*Cry of the Thunderbird*)に書いてある。グリドレー女史(Marion E. Gridley)の『今日のインディアン』*Indian of Today*や『アメリカの風景にまつわるインディアンの伝説』*Indian Legends of American Scenes*も著者がインディアンの間で育ち生活した人だから面白い。今、インディアンに「アラバマ」(「ここに眠ろう」というインディアン

語)はない。西へ追い立てられた酋長はウィグワムの杭を打ちつつ「アラバマ」と叫んだという。白人に迫害された彼等には同化する以外に生きる道はないであろう。また、自然保護が叫ばれていても、その荒廃は年々進んでゆくように思われる。遠い未来の日に、インディアンが森の湖で豊富な魚を釣る時が再びくるだろうと言ったソーロウの希望的予見は的はずれに違いない。彼の作品には面白い空想が多く見られる。彼にとってインディアンは古代原始人に至る途中のものであり、さらに、その遙か先に神の存在が予想されている。一歩ずつ前進するソーロウはエマスンのように一挙に神まで飛躍することは思いもよらないことであった。

ソーロウは本質的には神秘的自然愛好者である。彼は最も自然に近い人間としてアメリカ・インディアンを考えた。森の神話を理解できるインディアンは自然のなかで簡素な生活をしてきたからである。時として、原始林のように白人文化に影響を与えるからでもある。インディアンはアメリカ文学に書かれるべきであるとソーロウは考えた。文明という武器をもつ白人に出会うまでは、幾世紀も大自然によって彫刻されてきたインディアンは大地に生きる人間であった。大地にはいろいろな靈魂が宿っている。最初に神が生まれ、ついで動植物が生まれ、原始人から現代人に至っている。ソーロウは、野蛮を征服しようとする人間の文明進歩に反対して、昔のインディアンの酋長達に憧れた。白人の歴史は進歩向上の歴史で、インディアンの歴史は沈滞した習慣の歴史だとソーロウは考えた。しかし、彼等には自然の謎を解釈する能力があるから憧れたのである。彼は自然探求に生涯のほとんどを使った単純な変り者であり、軽蔑すべき愚か者かもしれない。45歳で若死したからこそ興味をもてる人間なのかも知れない。ある意味では彼は厄介なビートの人間であろう。読書家ソーロウは彼なりにアメリカ・インディアンの肖像画を描いた。はじめは軽蔑し、ついで差別し、ついに自然に通じる道として自然に近づくためにインディアンを愛するようになった。歴史が好きなソーロウは次第にさかのぼって古代史から人類の起源にまで研究したかったのだと思われる。その途中のものとして彼はインディアンに興味を抱いた。彼はインディアンの風習と原始人の風習の類似点を探りたかったのであろう。ソーロウは社会改革論者ではない。ブラウン隊長

を敬愛したのは、彼が復讐のために弓矢の代りに小銃を手にしたインディアン酋長の再来であり、有史以前のアメリカ精神の象徴でもあったとソーロウが想像したからであろうと思う。若い頃に意見が合わなかった父親がインディアンであればよかったと思ったほどのソーロウはいわば「白いインディアン」(White Indian) であった。

#### 参考書目

- Astrov, Margot, *The Winged Serpent*, N. Y.: John Day, 1946.  
 Boas, Franz, *The Mind of Primitive Man*, Macmillan, 1938.  
 —, *Race Language, and Culture*, Macmillan, 1940.  
 —, *Race, and Democratic Society*, Macmillan, 1945.  
 Boesen, Victor and Florence Curtis Graybill, *Edward sheriff Curtis: Visions of a Vanishing Race*, N. Y.: Thomas Y. Crowell, 1976.  
 Brandon, William, ed., *The Magic World: American Indian Songs and Poems*, N. Y.: William Morrow & Co., 1971.  
 Brown, J. E., *The North American Indians: Photographs by Edward S. Curtis*, N. Y.: Aperture, 1972.  
 Buell, Lawrence, *Literary Transcendentalism: Style and Vision in the American Renaissance*, 1973.  
 Channing, Sophia E., *The Maine Woods*, Tickner, 1864, Houghton Mifflin, 1906.  
 Coleman, A. D. and T. C. McLuhan, *Portraits from North American Indian Life*, N. Y.: Outerbridge and Lazard, 1972.  
 Curtis, E. S., *The North American Indian: Being a Series of Volumes Picturing and Describing the Indians of the United States and Alaska*, ed. by Frederick Webb Hodge, 20 vols, Seattle: E. S. Curtis, 1907—1930.  
 —, *In the Land of the Head-Hunters*, N. Y.: World Book, 1915.  
 —, *Indian days of Long Ago*, N. Y.: World Book, 1915.  
 Day, A. Grove, ed., *The Sky Clears: Poetry of the American Indians*, Univ. of Nebraska P., 1951.  
 Edward S. Curtis: *Photographer of the North American Indian*, N. Y.: Dodd, Mead & Co., 1977.  
 Fowler, Don D., *In a Sacred Manner We Live: Photographs of the North American Indian* by Edward S. Curtis, Mass.: Barre Publishers, 1972.  
 Gifford, Barry, ed., *Selected Writings of Edward S. Curtis*, Creative Art Book, 1976.  
 Hamilton, Charles, *Cry of the Thunderbird*,

- Holm, B. and G. I. Quimby, *Edward S. Curtis in the Land of the War Canoes: a Pioneer Cinematographer in the Pacific Northwest*, Seattle: Univ. of Washington P., 1980.
- Hymes, Dell, *In Vain I Tried to Tell You*, Univ. of Pennsylvania P., 1981.
- Jackson, Helen Hunt, *A Century of Dishonor*, 1881.
- , *Ramona*, 1884.
- Joseph, Alvin M., *The Indian Heritage of America*, Penguin Books, 1968.
- Lalemant, Jesuit Hierosme, *Relation* 1639—40.
- Levitas, Gloria, F. R. Vivello & J. J. Vivello, *American Indian Prose and Poetry*, N. Y.: G. P. Putnam's Son, 1974.
- Lyman, Christopher M., *The Vanishing Race and other Illusions: Photographs of Indian by Edward S. Curtis*, N. Y.: Pantheon Books, 1982.
- Mathews Washington, *The Navajo Night Chant*, 1902.
- Momaday, Scott, *House Made of Dawn*, 1968. (The Pulitzer Prize in fiction in May 1969.)
- , *The Way to Rainy Mountain*, 1969.
- Rexroth, Kenneth, *Assays*, N. Y.: New Directions, 1961.
- Rothenberg, Jerome, *Technicians of the Sacred*, Doubleday, 1968.
- , *Shaking the Pumpkin*, N. Y.: Doubleday, 1972.
- Sapir, Edward, *Language*, N. Y., 1921.
- , *Culture, Language, and Personality*, Univ. of California P., 1949.
- Silko, Leslie M., *Storyteller*, Seaver Books, 1981.
- Schoolcraft, Henry R., *Algic-Researches*.
- , *Oneota, or Characteristics of the Red Race of America*.
- Thoreau, H. D., "Indian Note-Books, 1—12", N. Y.: Morgan Library.
- Turner, Frederick, III, ed., *The Potable North American Indian Reader*, N. Y.: Viking Press, 1973.
- Velie, Alan R., ed., *American Indian Literature: An Anthology*, Univ. of Oklahoma 1979.
- Worf, Benjamin Lee, *Language, Thought & Reality*, Cambridge, Mass., 1964.
- (—White Indian II—(III) は「日本ソロー学会誌」所載)